退職にあたって

関根俊一

奈良大学に赴任して八年が経ったが、このあたりで大学での教員生活を閉じることにした。博物館での研究員も含めると正職の期間は都合四十年以上にもなるが、感慨はあまりない。それでもどこか緊張感をもって過ごして来たのだろう、今は少し肩の荷が下りた気がする。

退職にあたって履歴・職歴・執筆物の一覧とともに、何か一文をということであったが、生来几帳面という言葉からほど遠い性格であり、執筆したものがいったいどのくらいあるのか、また外部でどんな委員を務めて来たのかといったことの記録が十分でない。もちろん記憶も朦朧としている。そこで奈良大学に来て、最初の大学院修了生である吉田（旧姓高津）綾乃さんにお願いして、ある程度、体裁が整うようにまとめて頂いた。煩雑な作業をして頂いたことに、唯々、感謝申し上げたい。

なお、ここに挙げた執筆物以外にも、外部の文化財調査を厭わずやって来たこともあって、調書をたくさん書いてきた。客観的なデータのみならず、「所見」欄に詳細な考察を加えると、それは楽々と専門誌の「資料紹介」くらいのボリュームになるものもある。とくに私の専門である工芸品（寺院の場合は「仏具」と言っているが）については、行政の専門職の方々でも調書を書くのは難儀するらしい。まず何という名前のものなのかに始まって、どこの寸法を測ったらよいのか、どうやって作っているのか等々。そしていざ書こうとしても器種によって其々の各部名称に相違もあり、形状を記述するだけでも凄い負担になるのだという。そこで当方へと役回りが来るのである。というわけで、ここに挙げたもの以外にも、たくさんの調書が府県市町村のどこかに眠っているに違いない。あるいはそのいくつかは、各地の文化財保護審議会に際して、指定候補文化財の審議説明書、あるいは指定文化財の説明看板などとして日の目を見ているかもしれない。いずれも自分としてはかなり注力したものである。

愈々退職も近づき、混沌とした研究室の片づけをしていると、あれこれと投稿した雑誌や抜き刷りがでてくる。多くは書いたことさえあまり記憶にない。ふとある雑誌に書いた一文が目に留まった。そのまま引用する。

文化財にとって、もっともの大敵は人々の「無関心」であろう。人々が文化財に何の価値も見出せず、何の関心も寄せなくなったとき、文化財はその存在価値を失い、終焉を迎えるに違いない。本来、わが国の有形文化財は、それを形成している材質から見れば、そのほとんどは耐用年数を過ぎている。古文化財の宝庫奈良の地に伝世して、現在まで守り継がれてきた文化財の多くは、人々の信仰によって支えられてきた一面があることを忘れてはなるまい。そして、人々が知らず知らずのうちに、その先人の遺産をとおして、祖先の遺徳を学び、文化の偉大さを知ったことも事実であ

ろう。

しかし、現代は信仰だけでそれらを守ることが、もはや難しい時代となっている。ここで、もう一度、将来に向けて、人々がなんらかのかたちで文化財により関心を寄せられるよう、文化財のもつ多面的な価値を見出し、展示等の事業を媒介として有効な活用を図って行かなければならないのである。その点において、奈良が果たす役割はあまりにも大きい。（「文化財と奈良　―文化財の活用についての私論―」『奈良学研究』第二号、一九九九年）

奈良の文化財について考えた一文であるが、このようなことをすでに、二十年以上も前に考えていた。そして今回、本誌に掲載すべくすでに書き始めていた文章と比べてみると、ほとんど内容に違いがない。以下はその一部である（全文を掲載するには及ばないだろう…）。

ところで今日、山間部のみならず、奈良や京都の周辺の地域でさえも文化財、とくに社寺の宗教文化財が少なからず危機に瀕している。何よりも早急に、地域内の文化財の所在確認を進め、適切に評価し、その上で修理・保護といった一連の作業を進める必要がある。

人口減少や過疎化、そして宗教離れが著しい中、地域の中核あるいは人々を結ぶ紐帯として機能してきた社寺、そしてそこに残された文化財は、たとえ国レベルの文化財でなくても、地域にとっては掛け替えのないモノである。その危機を回避するには、その文化財を地域の人々がどのように継承してゆく方法を構築するのか、またそのためには何が必要なのか。そこには何よりも地域の人々の理解と協力、そして伝えようとする熱意と愛情がなければ、いくら行政が介入してもいずれその文化財は滅失するであろう。（中略）

一方で、近時、文化財を「文化資源」として活用する方向性も強く打ち出されている。そのこと自体は誤りではないと思うが、脆弱な文化財であれば、その安全をどのように担保するか、この議論がまずあるべきであろう。仮に「観光資源」とするなら、地域の有形・無形の指定文化財はもとより、登録文化財や未指定の文化財など重層的に把握し、関連施設も整えながら、魅力ある地域づくりを目指すべきであろう。

これを読み比べて見ると、私の文化財に対する認識、そして危機感、どうにかして貴重な文化財を守り伝えたいという仕事の方向性は、いささかも変わっていないことが、自分自身で理解できる。普段は気づかなかったことであるが、二十数年前の自分も、そして今の自分も、ほとんど変わることなく文化財に向き合ってきたということだろう。定年退職を迎え、自分はいったい何をやって来たのかということを自問自答してみても、即答できないで大いに不安であったが、少し安心した。

前文は、「文化資源」というキーワードもない時代であるから、「活用」というと、まだまだ博物館などの施設を利用しての「展示」が大きな部分を占めていたかと思う。その時代からすると、今日の文化財活用の方向性は多様になったと言わざるを得ない。だからこそ危険性も増したわけである。文化財の「保護」も「活用」も、重大な岐路に立たされているということであろう。

自問自省しつつ、今後どう過ごしていくべきか、少し先が見えてきたような気がする。

最後になったが、在職中お世話になった文化財学科の先生方に深甚の謝意を表するとともに、学科の益々の発展を祈念したい。